

第5回森林再生実行会議 議事録（要約）

令和4年2月20日（日）13：30～15：30

松本市役所 本庁 第一応接室

（香山）

第5回会議は、イベント型の開催を計画していましたが「まん延防止等重点措置」に伴い、市民の皆様はY o u T u b e配信で見ていただく形になった。

今回ゲストの市川さんと菊地さんにZ o o mで参加してもらっている。

第5回の課題は、市長への提案書をどんな形で作成していくかを議論していきたい。

提案書の構造を昨年度の森林再生検討会議で提出された提言書に沿って作成するため、森林の再生に向けた課題を改めて整理しておく必要がある。

まず初めに、専門家がない点についてどう思うか。

（小山）

専門家がないが、松本市は全国的に見れば優れたほうだ。

国や県は、林業職種で職員の採用を行っているが市町村レベルではかなり難しい。市町村の林業行政を預かる職員の技術力をどのようにして磨き維持していくかが必要。

県には林業普及指導員がいるが、少ないのが現状であり市町村との連携がなかなか難しい。

行政に頼った専門家もある一定量必要ではあるが、長野県や松本市も全体を見ていくのは非常に厳しいのが現状であることから、専門家の課題として挙げている。

（三木）

全国的な研究では、市町村の森林関係部門は、市町村森林整備計画等の法律に沿った業務で手一杯な状況であり、市全体の森林の事や市民からの要望にすぐ対応することは難しい。

国や県の協力も必要だが、市民が問題意識として考え、自ら示せる場所が必要だと思う。

市民の方々が考える森林についての認識は様々であり、市民の中にはどのようなニーズがあるかが分かれば、それぞれを専門とする人が助言をしたり、一緒に考え、一緒に実行していくことが初めてできる。

(香山)

現場と学問的な専門家、あるいは行政的な専門家の間を繋ぐ役割がフォレスターではないか。

提言書には、森林総合監理士（フォレスター）が必要と示されているが、全国的に見ても、民間で資格を持って活動している人はいるが、まだ行政に繋がるようなことはしていない。

(渡辺)

市民からの意見では、森林や林業に関する相談場所が分からないため、そういった情報を発信できたら良いと思う。

(香山)

ゲストの市川さんは、この森林再生について、市民目線で見たと時に、どんな印象を持っていますか。

(市川)

市民の中には関心はあるが、それをどう表に出して良いか分からないということも一つの課題と考える。

森林や林業に関係するイベントなどが幅広くあると、関心がある人が目に見えてきて、関心が薄いかどうか分かりやすい。

(渡辺)

森林や林業への関心の形は一括りではなく、多方面に派生する。また、松本市へ移住する方も多く、その中には関心を持つ人もいるはず。

クラフトフェア等のイベントに松本市以外からも興味を持ってくる方がいる。

一方で、松本市で育ち住んでいる方は、山が近くにありすぎて、当たり前にあるものと思っている方もいる。

(香山)

この会議は、松枯れに対して、多くの市民が関心を持ったことがきっかけとなった。

昨年度に提出された提言書では、松が枯れた後、どんな森林ができていくかが具体例として示され、それをどう繋げていくのかが分からない。

(小山)

私たちの生活とどのぐらい森が近いのかと考えていくと、案外近くない。

いろんな世代の方にとってみて、チャンスが少ない部分も当然あるが、チャンスを作り出す皆さんから森というキーワードが出にくくなっているのが問題なのではないか。

森との距離を近づけるチャンスを増やし続けていくには、どうしたらよいか
が課題。

(菊地)

自分にとっての山は日々眺めているものであり、アルプスは感動できるすごい山である。一方で今回議論の的になっている里山への関心も高まっている。

コンパクトな街を山が囲んでいる環境は、自分だけではなく、いろんな人にとって、仕事でも生活でも、日々の中で活かしたら良いのではないのかと
感じる。

市民の関心が薄いことが、この森林再生という取り組みに対して、どのように課題なのか。逆にその市民の関心が高まることで、森林再生がどう進んでいくことを皆さんが期待しているのかが僕も含めて、伝わっていくと良いのではないか。

その市民をどう定義するか、広い松本市では、住んでいる場所によって自然に対する感覚が異なる。市民という一括りにしがちなグラデーション（市民目線の違い）をどのように捉えるか。またグラデーションの中で特にどういう市民に関心を持ってもらうかが課題。

(香山)

市民の関心について、新しい意見が出た。

また、森林の定義を再度整理していきたいが、森林の範囲はどこまでが森林なのか。森林法に沿った範囲なのか。

松本市民にとっての森林は、森林法の森林とはイコールではない気がする。

(小山)

市民と行政の森林に対するお互いのグラデーションを持ちながら、両方が広い範囲を持っている。

このグラデーションを含みながら考え、且つ広がりすぎないように気を付けて、それぞれの人対森という関係性がちょっと綺麗にしていくと、もうちょっとこの計画ってというのが、面白くなるのかなって気がする。

(香山)

集落部周りで見えるところが里山と多くの人が今考えるかもしれないが、去年の専門家会議の中で出てきた議論で、1日で行って帰ってこられる範囲が里山じゃないかと考えた。

昔はそれほど人と森林の関わりってというのが深かった。

市民と森林をもう1回整理して、いろんな議論をすると整理の仕方が必要だなと思った。

(三木)

森林と市民との関わりという点のグラデーションがあるし、森林には法律上や林齢のグラデーションがある。これまでは割と大きな木ばかりの森林で、あまりグラデーションはなかったが、松枯れ後には、小学生や中学生でも管理できる、新しい森林が生まれており、これから森林自体の年齢のグラデーションが出てくるところも面白いと思う。

(香山)

木が生えているところが全部森林なのかは分からないが、松本市にとっての街路樹や公園はひとつの環境。そういう中で、議論の進め方や論議の立っている場所が常に動いていく、その動いていることを捕まえていくことが必要。

(市川)

森林にはきっかけがないといかないが、いっぱいあった知らないことが、分かってくると関わるハードルは下がってきたなという体感がある。

(香山)

市民に求められる役割は、なんだろうか、どこにあるんだろうか。

それを、今回の報告の中で一つ出していきたい。

松本市森林再生市民会議というのを作りましょうと去年の提言の中で言ったが、市民会議って何なのか、森林や市民というキーワードがど真ん中に入ってきていて、市民会議が何をやるのかというと長期ビジョンを作る。そのビジョンを政策が反映しなきゃいけない。

(小山)

今回みたいに松枯れで枯れてしまったら、皆さんが困ったねって、言い出すようなものに対して、常に何かあったらふっと動けて、そういう人の気持ちに寄り添うことができるスタイルってどうしたらいいのか。市民会議って言われたときに、このメンバーで考えたのはそんなイメージ。

(香山)

文書作りの上手い人が作った、たたき台について議論するのではなく、どうやって作っていくかを議論する市民会議としたい。

また、参加したくなる市民会議にするにはどうすればよいか。

(渡辺)

市民会議というタイトルが堅苦しいため、若い人が興味を持ちにくい。若い人が惹きつけられるような面白そうな所を作りたい。

(菊地)

名称自体はなんでもいい。話し合いをする会議ではなく、活動する活動体であることが伝わればよい。市民が受け身になるのではなく、いい意味で行政の縦割りや行政区画も無視して行政職員をリードするような形にしたい。

一方で、オフィシャルとして行政からも認めてもらう必要があれば、フランク過ぎない名称で市民会議くらいのフォーマルさが程よいと思う。

(市川)

参加を促すためにワクワク感を持ってもらう事がすごく大事で、画一的なものではなく、フランクに色々なやり方でアイデア発散が出来るような場所にすればいい。

(三木)

義務ではなく、行きたい場所に人は集まると思う。

これから社会の中心を担う若い世代を参加させたいが、どうやっていけばいいかは分からない。

(香山)

植えられた木について、今ある森林や木材に「困ったな」と思うより、「これ使ったら楽しい」と思えるような市民会議にしたほうがいい。

(小山)

ワクワク感があるようなものを作れば、興味や行動に繋がりが出て、本題(森)に繋がっていくということもある。

(菊地)

市民会議の在り方として、フォーマルとカジュアル（フランク）のバランスは正確に思いが伝わるように、市民や行政といった相手に合わせて、切り替えていけばいい。

松本に住む以上、自然と関わりがない人はいなくて、それぞれの関わり方やその程度には差がある。市民会議はそうした人たちがアプローチできたり、質問すればレスポンスしてくれるような専門家チームが望ましい。

「私とあの森」のように、森林・里山などを「私のこと」としてどう繋げていくかが大事。

（渡辺）

木材の活用には、「体験型」と「物」の二つの切り口があると思う。

木の伐採など普段経験できない価値ある体験は、人に思いを伝えるヒントになる。また、木材は経木などの様々な利用価値があるものに活用できる。

（香山）

この地域の製材業は力が弱くなっているが、市民が「地元の木を使いたい」思ったときに、製材所に繋がられるようなことが大事。

そのために、市民に森林や木材に関心を持ってもらう活動をする場所が市民会議ではないか。

この実行会議の作る提案書はどのように作って、どのように市民に広げていけばいいのかその方法を話したい。

この会議は行政としては珍しく、YouTubeで配信、Facebookのページを作って情報を発信しているが力不足で、とても市民に届いているとは言えない。作成する提案書をどうやって広げていけばよいか考えたい。

（渡辺）

会議自体をリアルタイムで、グラフィックレコーディングにより文章ではなくて、イラストを使って市民に届けられるような場所にしたいが、難しいので、皆さんに読んでもらえる文章やテキストがいいと思う。

（三木）

ダイジェストは必ず作って、市民が容易にアクセスできる場所に置いとかなければいけない。

ダイジェストを作ってホームページに載せるだけでなく、そのダイジェストを持って、これから市民会議に関わってもらいたい人のところに行き、4月から一緒にやりましょうと営業していくと絶対に面白いと思う。

(香山)

1年前の検討会議の際に、ものすごい分量の提言書ができて、業界の専門家からの評価は良かったが、市民への提言になってなかった。今回の実行会議でやりたいことは、市民の皆さんにどうやって一緒に動いてもらうかを大事にしていきたい。

(市川)

来年度市民会議をやるにあたって、個人的な理想が2つある。

1つはゴールありきではなくて、関わった人たちによって、やり方や内容が変わってもOKっていうスタンスだと参加しやすいし、面白いものが生まれそう。呼びかける時に文書的なものだけじゃなく、一緒にやりたいと思ってもらえるような市民向けの発信物があるといい。

もう1つは会議を開催する場所を市役所ではなく、木に関われる場所が良い。薪ストーブが1個あるだけでも場が和んだり、木って良いなって体感できてる中で話し合うと生まれてくるものが違ってくると思う。

(菊地)

この報告書は報告書として完結させ、来年度以降の具体的なアクションに繋げるための資料は別枠で考えた方が現実的且つ、効果的。

こういった話を進めていく時、専門知識を携えている方も必要で、その専門性と市民との間を繋げてくれる翻訳家も併せて必要だと思う。

松本平に住んでしまった以上、誰もが森林との関係性を持っているはず。限りなく少なくとも、この市民会議の委員は松本平に住んでしまった一人一人が委員であり、その委員の自覚があるかないかというところだと思う。

(香山)

報告書のまとめにあたり、ドラフトに載りきれしていない部分をランダムでいいので出して欲しい。

(小山)

体験学習のような学びながらいろいろなことを学んでいく、つまり、あなたと森を繋ぐ仕掛けをしていく。

それによって、森に関心がなかった人も自分事になり、未来のビジョンが出てくる。

(香山)

「専門家がない」とか「関心がない」という表現で突き放すのではなく、今回の報告書は温かく、全体包む表現を入れることに気をつけ、関心を持ってもらえるよう考えている。

(小山)

市民会議は、市民と森を繋げる翻訳家の文書を通して市民全員が理解する様になるまで、頑張る必要がある。

(三木)

松本市は2050年ゼロカーボンシティを目指している。

森林に関心がなくてもゼロカーボン社会に興味がある人には、ゼロカーボンのために、どんな森林が良いのか尋ねれば、ワクワクしてくると思う。

(渡辺)

報告書は報告書できちんとまとめ、他にシェアしやすいツールを使って市民会議に繋げていける様なものを作りたい。

(香山)

菊地さん、市川さんにはこの先も関わっていただきたいと思う。

(菊地)

松本平に暮らす人たちが、自然との関係性や心地よさを感じながら暮らしていくことが出来たら、幸福度があがるのではないか。

(市川)

一個人だけで山の事を考えてもなかなか答えがでないが、今日の話だけでも理解度が上がった。今後も実感がもてるような会議が出来るといいと思う。

(総合戦略室長)

市としても次年度に具体的なアクションを起こしていかなくてはいけない。森林に携わる方と市民を繋げる役割、責務が行政にはあると思っている。

(森林環境課長)

以上をもちまして第5回森林再生実行会議を終了します。